おおたらいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

〔総会報告〕

らいてう没後50年・『青鞜』創刊110周年
11・20記念のつどいの企画決まる

5月22日に第22回通常総会を開催、今年もコロナ禍のもとで多くの委任状をいただき、予定の議事を終了しました。らいてうの家はコロナ禍にもかかわらず会員の奮闘で4月24日にオープンしました（2面）。総会では、「家」の前の太陽光発電設置計画が「終了」したことは私たちの運動の成果であるとの報告を受け、これまでの経験をまとめること、自然エネルギーの在り方やあずまや高原の今後について引き続き考えていくことを確認しました（3面）。

らいてう没後50年・『青鞜』創刊110周年

記念のつどい　今　生かそう　らいてうのこころざし

11月20日（土）午後　会場：新日本婦人の会（オンラインも）
報告：米田佐代子
発言：奥村直史　北原みのり　米山淳子

没後50年・『青鞜』創刊110周年企画の成功を

今年最大の事業である「らいてう没後50年・『青鞜』創刊110周年」企画。すでに、企画パネル、新公開日記の一部（複製）などは「家」に展示され、反響が広がっています。総会では記念のつどいの企画内容（別項）が提案・確認され、早速取り組みが始まっています。コロナ禍でオンライン併用の可能性が高く、新たな挑戦となりますが、これまでにない参加者の広がりを実現し、らいてうのこころざしをどう受けつぎ生かすかを語り合う場にしたいものです。

当会所蔵の「らいてう資料」の保存活用は長らく会の懸案事項でしたが、2021年度中を目途に奥村家所蔵の資料と共に法政大学大原社会問題研究所に寄贈することが確認されました。今後の資料整理、活用、公開・非公開についてなど、詳細は慎重に検討していくとの報告がありました。

会と「家」の活動の維持発展めざし

会の定款変更が承認され、役員体制は会長制から代表理事制に変更されます。東京都の定款変更認証を待ち、秋には理事会で代表理事が互選されます。それまでは、今年度の役員（別項）が会の運営にあたります。当会にとって、記念すべき大事な一年のスタートです。これまでも、会と「家」はその維持発展のため、ご寄附やボランティア活動をはじめ、みなさまのご協力を仰いで参りました。「平和構築にジェンダー視点を」が国際的な流れとなっている今、記念企画を成功させて、改めてらいてうを発見し、そのこころざしを生かすことができるよう、みなさま方の変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

今年度の役員

会長・米田佐代子
副会長・井上美穂子、折井美耶子、沓掛美知子、小林明子、堀江ゆり、三留弥生　**事務局長**・金輪きみ子　**理事**・青木俊子、植草充代、北澤有希子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林典子、竹花みい子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子
監事・佐久間由美子、由比ヶ濵直子

2021年 らいてうの家 オープン

４月24日（土）午後から、例年より規模を縮小してオープンセレモニーを催しました。数日前、共同通信等で「未公開日記公開」の記事が載ったため、共同通信・地元新聞の記者の方々や一般の方々も来館し、32名の参加でした。玄関には、会員の方の厚意によりマーガレットの大鉢とパンジーが飾られ、来館者を出迎えました。

依然としたコロナ禍の中で４月にオープンでき嬉しいという司会の言葉に始まり、上田真田らいてうの会の沓掛会長の挨拶がありました。緊急事態宣言が出される直前という理由で米田館長の来館が叶わず残念であること、今日の学習会のための補足説明を本日午前３時に送ってくださったこと、その資料をもとに学習会ではらいてうさんのこころざしをくみ取りたいと述べました。

続いて地元の声楽家：深井佐代子さん（伴奏：西沢さち子さん）の独唱に聞き入りました。春の歌を２曲、「この道」、カンツォーネを２曲、そして最後に「いのちの歌」がロフトから響きわたりました。マスクをしての歌唱にもかかわらずその圧倒的声量の美しい歌声は、聴衆にエネルギーを与え、オープニングに相応しいものでした。

学習会では、米田館長に代わり元上田らいてうの会会長の杉山さんより「新発見の平塚らいてう資料についての補足的解説」―米田佐代子編―をもとに説明がありました。１９５０年に発表された「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」について特に取り上げ、今につながるという事で読み上げて皆で確認をしました。非武装、世界平和という内容は次世代に引き継ぐべき課題であり、「右でも左でもなく、女性としての視点で戦争に反対するという意思表示をすべきだ」と考えたらいてうさんの姿勢を受け継いでいかなければならないと述べました。

この後、今年度の６枚のパネルについて、沓掛会長より解説がありました。禅の修行、『青鞜』発刊、恋愛、結婚、出産、家庭、戦争体験、戦後のらいてうさんのライフステージを通して、女性の権利向上や世界平和実現に向けての運動等に関わっていった過程を端的にまとめて記載しているという内容を、更に要約して話してもらいました。今回公開の日記やノートには、「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」の草案や婦人の総意を代表する声明を出すべきと考えるに至った経過が綴られています。らいてう自伝〈戦後篇〉の裏付けや背景、言動の意義も含め、７月予定のらいてう講座で米田館長に熱く語ってほしいと締めくくりました。

その後、地元新聞を始めとしてこれまでになく多くの新聞に「らいてうの家オープン」の記事が載りました。これにより、一人でも多くの方が来館してくれるといいなと思います。**（宮下昌子）**

平塚らいてう没後50年特別展

らいてうの軌跡―田端で過ごした時代を中心に

社会活動から家庭的な一面まで紹介

田端文士村記念館　☎０３・５６８５・５１７１

（ＪＲ山手線・京浜東北線田端駅北口徒歩２分）

６／１～９／19　10時～17時　月曜休館

終了

あずまや高原太陽光発電計画
地元と全国の反対運動みのる！

2017年から立ち続ける看板

２０１７年11月の事業者説明会以後、動きがなかった太陽光発電設備設置計画は、このほど土地所有者の野沢ホスピタリティに問い合わせたところ「今後計画推進の意志はない」との返答で、現地の告知看板も撤去されました。上田市都市計画課にも同様の応答があり、計画は終了したものと判断しました。正式な書面回答はありませんが、会としては現在の土地所有者による計画は終了（撤退）と判断しました。

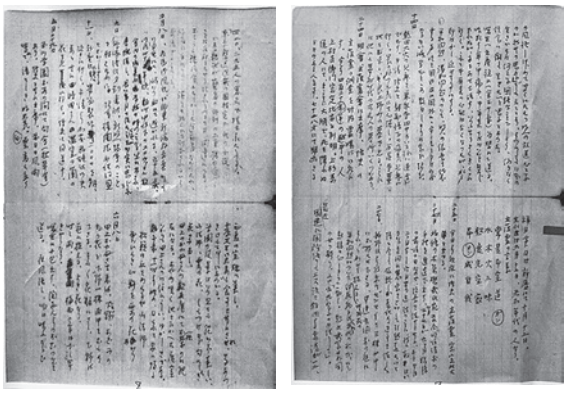
これは、地元大日向自治会や住民のみなさん、地元会員、別荘自治会などの反対をはじめ、全国から集まった署名、また上田市による「国立公園内設置を推奨しない」とする規制条例の策定など、多くの声がみのった大きな成果です。みなさんのご協力に深く感謝いたします。らいてうの会では、運動のまとめを作成する予定です。

ただし、隣接のあずまや高原ホテルは昨年コロナ禍の影響で廃業、このままではあずまや高原の環境が悪化しらいてうの家にも影響が及びかねません。守り抜いた自然を生かし多くの人びとの「いこいのひろば」となるような方向でホテルの再生も望まれます。

（米田佐代子）

「らいてう日記」公開に大きな反響
資料を整理公開へ

らいてうの家では、『青鞜』創刊１１０年『平塚らいてう没後50年』を記念して、らいてうの生涯を振り返るパネル展示とともに、未公開であったらいてうの１９４８年から50年代初めの日記（奥村家所蔵）の一部を複製展示（資料劣化のため現物展示見合わせ）しました。


1950年の「希望要項」に直接関連する記述が見られる「らいてう日記」

このニュースは共同通信の配信で大きな反響を呼び、北海道から沖縄まで約30紙にのぼる地方紙と全国紙の長野県版などで報道されました（一覧はらいてうの会ホームページ）。らいてうの家オープンには新聞取材陣が詰めかけ、その後も問い合わせが続いています。

これは、らいてうが１９５０年６月、野上弥生子らとともに「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」という声明を発表、「軍事基地反対」「戦争非協力」の立場から単独講和反対を訴えたとき、「思い悩み」ながら「女性が平和について発言しなくては」と自ら草案を書いたいきさつがリアルに書き込まれたものです。「女性が自分で考え行動する」というらいてうの信条は、「女は黙っていない」という現代のさきがけでした。７月11日にはらいてうの家で日記をめぐる講座（講師は米田会長）開催の予定です。

なお、この資料を含むらいてうの生資料は、らいてうの会保存の資料と併せて法政大学大原社会問題研究所に整理公開を委ねる方向で、現在準備中です。詳細は後日報告します。（米田佐代子）

らいてうの「動く映像」発見！

中部日本放送（中京エリア　愛知・岐阜・三重）が１９６７年１月に放送したドキュメント番組『この１００年―女性解放―』に、らいてうが登場していることがわかりました。６月27日に再放送。らいてうの「動く映像」はほとんどないので、貴重です。ＤＶＤが入手出来たらみんなで見ましょう。

シリーズ〈新婦人協会の人々〉No.8

河崎　なつ

河崎なつは、日本母親大会の委員長として、戦後の女性運動の一角を強力に推進した人として知られているが、その河崎がはじめてかかわった女性運動は新婦人協会だった。

なつは１８８９年奈良県五条町で生まれた。奈良女子師範を卒業したのち、五条小学校に勤務したが、上京し女子高等師範に学び、東京女子大が創立されると作文の教師となった。そのころ流行したスペイン風邪にかかり長い療養生活を送ったが、そのなかで学校教育だけでは果たされない社会の矛盾に目を開かされた。大正デモクラシーのさなか、国家主義的公教育に疑問をもったなつは、西村伊作の自由と個性を尊重する文化学院（１９２１年創立）に共鳴し設立に協力し、教師となった。

１９１９（大正８）年発足の新婦人協会に、なつがいつ入会したか定かではないが、「本部通信」の会費領収欄には必ずなつの名前が記載されている。教育者という立場から、あまり表だった活動は控えていたのだろう。しかし女教員会の結成には中心になって動いたという。また当時活発だった学生運動にかかわった女子学生たちを理解し、つねに援助し続けてもいた。婦選獲得同盟や保育運動などにも力を注ぎ、無産者託児所には多額の財政的援助をしていた。

戦後、民法改正のための司法法制審議会委員となり、家族制度廃止に尽力。１９４７年第１回参議院選挙に全国区で当選し、６年間母と子の問題に取り組んだ。１９５３年、日本婦人団体連合会結成にあたっては陰から尽力した。ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験を機に巻き起こった平和運動は、１９５５年日本母親大会の発足につながった。なつは大会事務局長を務め、56年から66年に病没するまで大会委員長を務めた。

なつにとって最後の大会となった第12回日本母親大会での「母親が変われば社会が変わる」はなつの絶唱となった。１９６６年11月16日、77歳で永眠。

（折井美耶子）

奥村直史さんの新著

奥村直史さんが『平塚らいてう―その思想と孫から見た素顔』（平凡社ライブラリー）を出版されました。10年前の新書版にオリジナルな一章をくわえ、らいてうが戦中の動揺から戦後自ら平和の思想を紡ぎだして行動する過程を考察した待望の増補版。

平凡社ライブラリー
（1500円＋税）

追悼　飯村しのぶさん

３月22日、本会理事の飯村しのぶさんが急逝されました。ご闘病中とうかがっていましたが、あまりにも若く、早すぎるお別れに言葉がありません。心から哀悼の意をささげます。

飯村さんは、東京都立大学卒業後、東京図書株式会社第二編集部長として活躍、その経験を生かして本会では『平塚らいてうの会紀要』編集を担当されました。テープ起こしや割付、校正まで一手に引き受け、どんな難問にも苦情を言わず「だいじょうぶ」と仕上げてくださったときの笑顔にいつもはげまされました。今は、静かにお休みくださいますことを。

（米田佐代子）

【事務局日誌】

４月２日　紀要編集会議
４月６日　没後50年記念のつどい相談会（オンライン）
４月８日　第５回常任理事会（オンライン）
４月13日　共同通信取材・未公開日記
４月17日～19日　らいてうの家オープン準備
４月23日　没後50年記念のつどい相談会（オンライン）
４月24日　らいてうの家オープン
５月６日　２０２０年度会計監査を受ける
５月13日　第７回理事会（オンライン）
５月22日　第22回通常総会・第１回理事会（於新婦人中央本部会議室）
６月６日　森のめぐみ講座①らいてうの庭の整備
６月11日　第２回理事会（オンライン）